

出来損ないの暗殺者の 物語

Cブレイカー

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ここに一人の少年が居た、存在を否定され、愛した人は消えていき、孤独に生きて少年……年……

そんな現実から逃げてSAOの世界に一人逃げ込んだ、

しかし……

そこで待っていたのはデスゲームだった

目次

第零章	過去	1
第一章	夢の終わりと仕事の始まり	6

第零章 過去

——目が覚めた。

傍には泣いている男の人と女の人と、何故だか表情の分からない女の人が居た。どうして泣いているんだろう？

表情の分からない女の人が何かをを言っている。

「……今更何を言っている、此奴を私に受け渡す約束だろう？」

受け渡す？何でだろう……

動こうとしたけど体は動かなかつた、首も動かない。

「なら俺を使えばいいだろう!!この子はまだ赤子だろう!!」

「フン……それでは意味が無いんだよ、それに言ったのは貴様だろう？」

「ツ……この外道がツ……」

「人殺しに言われたくはないね、それに自分の子供を売ると言ったのは貴様だ」

男の人と表情の分からない女の人が言い合っている、僕はまだ赤子なんだ……だから動けないのかな？

不思議には思わなかった、何故か当然の様に感じた。

「それとも此奴に『猶予』を与えるか？ 貴様の命と引き換えに？」

「……ッ?!?!いいだろう、なら持つていけ。」

「だめよ!!お父さん!!貴方にまで居なくなったら私は……!!!」

「ああ、すまない……、この子を頼む、父親が居なくても立派に育てる様に……頼む。」

男の人の体が光になって消え始めた、

女の人により一層泣きだした。

「ごめんよ……父さんが傍に居てあげられなくて……」

男の人は僕のお父さんなのかな？

それで泣いてる女の人が僕のお母さん？

お父さんが僕の頬に触れた、暖かった

そして――

それが父さんに触れた最期の時だった。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

それから七年後

僕が物心がつくのは早く小学校に入る頃には物心がついていた。

そして・・・

母さんが死んだ。

色々と長く、そして短かった。

母さんが死んだ後には家とお金とそれと・・・思い出しか残らなかった。

僕は何処に行っても結局は否定された。

僕は出来るだけ明るく振舞った。

通りを歩けばいろんな人に蔑まされた。

「またあの子よ・・・」

「なんであんな奴がこの町に居るんだよ」

「もう、キエレバイイノニ」

僕だって消えてしまいたい、でも、それは出来ない。

なぜなら僕は後八年後になったら、

神様に『影』として仕事をさせられるからだという

そして八年が経った。

この世界は相変わらずに非情に動いている。
だけれども一つ気休めとも取れる希望があった。

茅場晶彦が作り出した仮想世界だった。

『これはゲームであつても遊びではない』

それは、僕が求めていた安息の地であつた

ここでも僕らは陽の光を浴びていられるかもしれない。

ここでも普通に生きられるかもしれない。

ここでもなら

第一章 夢の終わりと仕事の始まり

目が覚めた。

体を起こして部屋を見る

見渡してみるが異常は無い

いや、一つあった。

「あつたあつた!! ナーブギア!!!」

この日のために買ったナーブギアだ、無くしては困る

誕生日の様な気分ですれを被り正式サービス開始の五分前になっていることを確認する。

「よしっ!!!」

アバターには気合を入れて自分とは似ても似つかないカワイイ系ではなくイケメンに、小さい体は長身に作り込んだ

新しい世界なのだから当たり前だよな!

ただ、名前は本名のリュウガにした。これは母さんと父さんが付けてくれた大切な月影龍雅という名前だから・・・

・・・後一分になった!!

やはり気分が高まる、ドクンドクンという時間が経つ事に高まる鼓動に意識を集中させ一分間

——— 遂に正式サービス開始

「リンクスタート!!!」

大声で叫ぶと視界が白く染まり色々な色のライン飛んできて設定画面が開かれたが一瞬で終わらせ《Welcome To sword art Online!》の文字が現れて視界がまた真っ白に染まると僕は石造りの地面に立っていた。

「これが………仮想世界………!!!」

周りには次々とプレイヤー達がログインしてくる中今の自分に出来る限り最大の速度で駆け抜けて装備を揃えて『はじまりの街』周辺に出てきた。

「うわぁ………」

——驚いた……

そこには見渡す限りの草原だった。

現実以上のグラフィックに驚きながらも周りを見ると、
所々に青い体毛の猪《フレンジーボア》が居た。

「それじゃぁ………行きますか!!!」

高まる期待に胸を膨らませて《フレンジーボア》目掛けてダガーを構え走っていった。

|||||

あれからかなりの時間が過ぎた。

今は五時二十分、かなりの時間狩りをしていた

今のレベルは5レベルまで上げた。

「ふう．．．結構上がったなあ．．．」

流石に《フレンジーボア》はそろそろ飽きてきてしまっている。

その数は数百体を流れ作業で片してしまっている。

今では走りながら《フレンジーボア》の急所にダガーで斬撃を加えて一撃で葬っている。

「そろそろ街に戻ろうかな．．．いや、このレベルなら行けるかな？」

そんな事を考えていたら突如、夕日で赤く染まる世界に鐘の音が響いた。

「えっ？鐘の音？」

そう思い街の方を向こうと振り向いたが、視界が青白く染まり《はじまりの街》の広場に転移されていた。